

コミュニティ・ツーリズム導入期における異文化普及理論の援用可能性の検討 —— 観光の発展モデルの限界をこえて

なかじま まみ
中嶋 真美 東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程

Various phenomena have generated for the recent years around tourism development. Community Based Tourism (CBT) is a way of development with local participation. This study aims to propose a way of framework to examine the diffusion model of CBT. Existing tourism developmental models like Butler's model have little consideration to the introduction phase. The issues and requirements on the implementation of CBT are clarified by using the intercultural diffusion process. CBT is a new and unfamiliar way of development for the locals and it means a kind of "innovation." Considering the antecedent conditions with "innovation," we can decrease the risks in the introduction phase which the traditional models have not pointed out. By regarding CBT as a process of "intercultural diffusion" and using the model, we can get the various viewpoints and make CBT function effectively as a tool of social development in developing countries.

1. 背景・目的・方法

近年、農村地域を対象に住民参加型開発の一手法として、コミュニティ・ツーリズム(Community-Based Tourism: 以下、CBT)が注目されている。CBTは、地域住民が主体となり観光事業を運営することを通じて地域発展を目指す新たな観光形態であり、アフリカにおいては、とりわけ他に収益資源がない農村地域で実施されるケースが多い。従来の観光開発研究においては、山下(1996)はインドネシア・バリ島、関根(2000)はソロモン諸島、山村(2002)は中国・雲南省、また橋本(1999)はフィジーを事例に研究を行っており彼らによる学問的蓄積がなされてきたが、それらを体系的に整理する試みは少なく、理論的なアプローチが不十分であったことが指摘できる。加速度的に拡大する観光産業と、多くの途上国での活用が増えるCBTの現況を見るにつけ、CBTが今後の開発戦略の中である一定の位置を確立していくことは否定しがたく、実際の地域開発手法として有効に機能させるためには、理論的分析が必要であることは言うまでもない。同時に、CBTが地域開発手法であるとともに観光事業として機能する以上は、観光の発展プロセスに応じた対応が不可欠となる。そこで本稿では、従

来の観光の発展モデルの批判的検討を通じ、CBTの展開プロセス上の課題と条件を明らかにし、途上国におけるCBTの活用を通じた観光開発のあり方の検討方法を提示することを目的とした。方法は文献研究を中心とし、バトラーによる観光の発展モデルと異文化普及理論のイノベーション普及過程を援用し、課題の検討を行った。

2. 観光の発展モデルと異文化普及理論

2・1 観光の発展モデル

観光地の発展・衰退を巡る観光地の発展段階に関する議論は、早くにはマス・ツーリズムの揺籃期の1950年代に始まっている(石井、2002)。最も現代的な課題であるサステイナブル・ツーリズムに関わる研究においても、また観光地のマーケティングという文脈においても、観光地の発展段階についての考察は示唆に富むところが多い。観光地の変遷は、観光者の好みやニーズの変化、ハード面の施設のたえざる自然劣化と適宜の改修、当該観光地本来の人気の源であった自然ないし文化的魅力の変化(時には消滅)などを含む多様な要因によってもたらされる(バトラー、2002)。観光が一連の経過をたどって発展または衰退するという考えは、これまでもドフェール(1954)

やクリスタラー(1964)、ブログ(1972)といった様々な研究者によって指摘されている。さらにノロンハ(1976)やコーエン(1978)、そしてバトラー(2002)らが議論を進めており、近年では環境、開発、異文化接触など、観光に関わる諸分野との関わりから、途上国の観光開発に関わる議論が展開されつつある。

2・2 バトラーの発展モデルに着目して

以上のような様々な議論が展開する中、観光開発に関する議論の中で最も大きなインパクトを与えた理論とされるのが、バトラーによる観光地の発展段階に関する論文である¹⁾(Oppermann and Chon, 1997)。バトラー(1980)はその論文の中で商品のライフサイクル概念を援用し、観光地の発展パターン(以下、バトラーモデル)を以下の6段階に分けて提示した²⁾(図-1)。それぞれの段階での特性は、以下のとおりである。

①exploration stage 探検段階……観光客は極めて少なく、当該地域のハード構造や社会環境というべきソフト構造は、まだ観光によって変えられることはなく、来訪者の往来は居住者の経済生活、社会生活にほとんど影響を及ぼさない。

